

自選五十首



久々湊盈子

熱き夜どこかでわれを欲^ほりている若者のありうつくしく眠る

酒に灼く胸持つ君を知りてより母に告げ得ぬ暗き恋する

汗ぬぐう君に神々不在にて見はるかすとき海は展がる

海の中しおからいキス 立ちあがり君はたちまち気化しゆきたり

この深き絶望をみよひまわりは高く枯れたる夢のなきがら

曇天の菜のはなよりも色褪せて人を追いたる若き日もあり

性愛はさびしき行為いっさんにいのちの森を駆けぬくごとき

狂奔の恋もありしを今しんと花の奥なる花のくらがり

咲きあふれ天になみうつさくらばな満ちたることはかくもさびしき

日常へ帰りゆくべく日ぐるまの巨き頭^{こゝろ}を見つつ曲がれり

自恣^{じし}つよきわれのひと生^よに俘虜となす男ひとり^{ひと}を先立て歩む

「熱く神話を」

「黒鍵」

これまでの自分の歌集を眺めながら歌を選んでゆくというのは愉^{たの}しい作業だ。いろんな機会に何度も自選してきたのだが、そのつど選ぶ歌が変わってくるのも面白い。もちろん依頼の内容によって、単独歌集からの一〇首であったり、全作品からの二〇首であったり、何らかのテーマに沿った自選であったりするから、いちがいに言えないが、選ぶときの心持ち次第で、こんなに違う印象になるのかと、我ながらおかしくなってしまう。

ギミックという言葉がある。短歌の世界では藤原龍一郎さんが最初に使いだしたと思うのだが、手元の外来語辞典によれば、「テレビの特殊効果の総称。トリック」という意味らしい。要するに、自己のイメージ

どのように描きても亡母に似てしまふ眉のかたちはつくづく淋し

北向きの小部屋に古き書架がありボオもハイネも久しく読まぬ

小さき自負に顔あげてゆく冬の日の空をま横に切りてとぶ鴨ひよ

まさやかにきさらぎ霽はれて一對の翼あるごとく坂をくだれり

小綬鶏の声つやめくを日曜のめざめに聞きぬ五月快晴

風の声熄やみたる夜明けわらわらと森はおのれの息にて動く

睦みあう春の家族を遠まきに青みはじめし森の地衣類

今日われは鬱ふさの日なればみなぎれる冬大根を下げて歩めり

フェミニズムの正しさゆえの空しさが手を汚さないやつにわかるか

ガレー船のオールを離せと説くひとの耳にひかれるピアスがふたつ

死ぬまでをともに暮らすと来し舅おぢのネルの寝巻が風にはためく

日曜ひるの午には揃ひらう家族にて鍋いっばいに乾麵ゆがく

湯上りの瘦軀に水を浴ぶる音卒寿に向かう舅のいつこく

二人子を捨てて得るべき充足のありと思えず仕舞湯を抜く

いつの日か失うために育て来し娘こにつまだちてリボンを結ぶ

老いという残酷な時間を見据えつつ浚瓶しひんの澱を砂にて擦こする

刺す焙る殺す吐かせる削そぐ締める荒事ならで厨のことは

ねんごろに大根を炊き魚を裂き食に向かうは時として慰藉

辛口の酒に添ひえたる氷頭ひずなます寒夜なれども気分上々

つながれし自由といえどはればれと睦月の空に凧が遊べる

「家族」

をアピールするための戦略である。同じような世代、同じような体験、同じような能力を持った人達のなかで、自分でなければならぬ、といった際立った印象を残してゆくためには、このギミックはとても大切なことなのではないだろうか。

私の場合、それは思わぬところから来た。「来た」としかいいようがないのだが、旅先で姑しよごが倒れて緊急入院し、その場からいきなり八五歳の舅おぢは我が家に直行、その日から同居ということになったのである。そこから私の歌がそれまでとは趣を異にしたのは、当然といえば当然のなりゆきであったろう。二人の子供と夫婦の平凡な暮らしに、突然高齢の男親が闖入ちんぷしてきたのだから、生活スタイルの違いに戸惑とまどったり、価値観の差にイライラしたり、慣れるまでは結構たいへんだった。

しかし、そこで私は、「これでいこう」と腹を括くわつたのである。高齢化社会の到来は必定であったし、自分にとっても未知の分野である生老病死をどう歌っていくか。決断すれば思い切りがいいのが唯一の取り柄である。次の歌集はタイトルも思い切った「家族」とした。ギミックがうまくいったかどうかは、その後の作品を読んでいただくほかはない。（くくみなど・えいこ「個性」）

「射干」

かつてわが胎にありしをふとぶととトロンボーンを吹くのどぼとけ

感情線乱れておればつくづくと素直ならざる酉年生まれ

尊菜も舌に遊ばすほのかなる夏の香りや京の水の香

合歓咲けばいまだも逸るころにて人恋いやまぬ小綬鶏の声

恍惻隠の情なかばして老老のちりめん皺の臀を拭く

遠い未来に必ず訣れがあることを疑わずされど日々に思わず

晩節を全うしつつ背をのべて舅が打ちこむ盤上の石

女の骨は鬆が入りやすく心には魔が入りやすく五十となりぬ

羅をまといたるごとけぶりたち今日はおみなと思ふ榎の木

さえずりの網打つごとくのぼりゆきひばりが領す湿原の春

「あらばしり」

百近きちちが嘆きは残年の短かさならずひと日の長さ

香りたつ「八海山」のあらばしり暖簾の外は春の雨です

世にはもう見たきものなどなきように白寿の舅がまた眠りこむ

おみなにはなき愉しみに髭撫でて近代という男の時代

われのほかは大きな乳房伊予なまり聞きつつ道後の湯にしずみたり

歳月が抉りし虚をいだきつつ戦ぐ大樟 舅の百歳

亡き母の手になる浴衣みどりこの襦袢にせむと日向にほどく

江戸染に塩瀬を締めて行かむかな立春はおみなに嬉しき節氣

耳順の夫に百寿の父あり当歳の孫あり今年の花ざかり